

ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇「こうもり」より 序曲

「ワルツ王」ヨハン・シュトラウスII世(1825-1899)のウィーン風オペレッタ(喜歌劇)の最高傑作「こうもり」は、舞踏会に集まる人々が繰り広げる喜劇の中に華やいだウィーン情緒があふれる魅力的な作品。「オペレッタの王様」とも呼ばれ、ウィーンでは特別な演出として扱われている。その序曲は、全曲のエッセンスを楽しめる曲としてしばしば演奏会でも取り上げられる人気曲。オペレッタの中のいろいろな曲がポプリ(接続曲)風に続々と登場し、ワルツやポルカのリズムが華やかでうきうきした気分を盛り上げる。途中、鐘が6回の鳴るのは、第2幕の最後で舞踏会の終わりを告げる午前6時の鐘である。

ヨハン・シュトラウスII世: ワルツ「春の声」Op.410

ヨハン・シュトラウスII世の180曲以上のワルツの中で、おそらく10本の指に入る人気曲であろう。今回のようにオーケストラ曲としても親しまれているが、もともとはコロラトゥーラ・ソプラノのための声楽ワルツとして作曲されたものだ。シュトラウスはブダペストを訪れた際、F.リストも同席したある晩餐会の席の余興に、即興でこのワルツを作ったと伝えられている。春の訪れの歓びを歌った曲だが、当時30歳年下の未亡人アデーレとの生活をスタートさせ、幸福の絶頂にあった58歳のシュトラウスの若々しい歓びが、そこには映し出されているかのようだ。

フランツ・レハール: 喜歌劇「ジュディッタ」より「熱き口づけを」

エメリッヒ・カールマンとともにウイナ・オペレッタの「銀の時代」を築き上げた作曲家フランツ・レハール(1870-1948)の音楽は、親しみやすく、甘美で、何より魅惑的な歌にあふれている。そんなレハール最後のオペレッタ「ジュディッタ」は、限りなくオペラに近い野心作。情熱的な人妻ジュディッタは若い将校を追って北アフリカへ行き、ナイトクラブの人気歌手になる。集まった男達を挑発して歌うのがこの歌だ。「私にも分からない、人がなぜすぐに愛を語るのか。でも皆が私の歌に耳を傾けるとき、その訳が分かる」「私の唇は熱い口づけ、私の手足はたおやかで白い。私は酔ったように踊る、なぜなら、私の口づけは熱い口づけだと知っているから」。

ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇「ジプシー男爵」より

“さあ、手を差し伸べよ”(徴兵の歌)

「こうもり」に次いで高い人気を誇る「ジプシー男爵」は、ハンガリー風のエキゾチックな情緒あふれる作品。ハンガリーの作家ヨーカイ・モールの小説に基づき、シュトラウスII世には珍しく2年以上の歳月をかけて作曲された。初演は大成を取め、その後ウィーンで人気を博してゆく「ハンガリーもの」オペレッタの火付け役となった。

「徴兵の歌」として知られるこのアリアは、徴兵官としてやってきたホモナイ伯爵が、みんなに徴兵の酒をすすめる場面で歌われる。「さあ手を差し伸べよ、国民の義務だ。恋人と別れて、徴兵の酒を飲んでくれ。兄弟よ、軍隊に來たれ。恋と酒とは人生の味!二つとも甘く陽気な真実で、輕騎兵たちの大好物!」。

カール・ミヒャエル・ツィーラー: ワルツ「いらっしやいませ」Op.518

ウィーン生まれの作曲家カーツ・ミヒャエル・ツィーラー(1844-1922)は、ヨハン・シュトラウスII世の良きライバルとして活躍し、600曲以上のワルツやポルカ、23のオペレッタを残した。この「いらっしやいませ」は、新しいメロディーが次々と登場して踊る人々を飽きさせないワルツ。タイトルの「Hereinspaziert! (ヘラインシュパツィールト)」とは、ホイリゲ(居酒屋)などで使われるウィーンの言葉で、陽気なウィーン子のサービス精神が曲にも表れている。

ヨーゼフ・シュトラウス: ポルカ・シュネル「休暇旅行で」Op.133

ボヘミア地方で生まれたといわれる農民の踊り「ポルカ」は、ヨハン・シュトラウスI世によって初めてウィーンの舞踏会場に紹介され、次第に人気を集めていった。当初はゆっくりとしたテンポの「フランス風ポルカ」だけだったが、ヨハンII世の時代になると「ポルカ・シュネル(速いポルカ)」も登場し、様々な性格のポルカが生み出されていく。シュトラウス家の次男ヨーゼフ(1827-1870)は、兄の影に隠れがちながら多くのワルツやポルカを残し、その詩情に溢れた作風から「舞曲のシューベルト」と呼ばれた。宇宙の運行を偉大なハーモニーとしてとらえた代表作「天体の音楽」のように、ユニークなアイデアの作品が少なくない。この<休暇旅行で>は「速いポルカ」のスタイルによる爽快で楽しい一曲。

エメリッヒ・カールマン: 喜歌劇「マリツァ伯爵令嬢」より

“行こう! ヴァラシュェディンへ”

レハールとともに20世紀前半のウイナ・オペレッタ「銀の時代」を築いたエメリッヒ・カールマン(1882-1953)のオペレッタの中で、「チャールダーシュの女王」に次いでしばしば上演される「マリツァ伯爵令嬢」は、ブダペスト郊外のマリツァ伯爵の領地を舞台に、伯爵令嬢マリツァとウィーンの没落貴族タシロの恋を、ジプシー・ヴァイオリンの甘い音色にのせて描く。ここで歌われる二重唱は、第1幕でジプバン男爵が登場する場面で歌われる楽しいといばいい一曲。「私はあなたに一目ぼれしてしまったのだ!さあ、私の故郷ヴァラシュェディンに共に行きましょう!」とマリツァを誘う。

ハンス・クリスティアン・ロンビ: シャンパン・ギャロップ Op.14

ギャロップとは馬術の早駆けを意味する用語から転じて、テンポの速い2/4拍子の舞曲の名前となったもので、もっとも有名なのはフレンチ・カンカンでお馴染みのオッフエンバック「天国と地獄」の曲(地獄のギャロップ)だろう。シュトラウスI世はこの曲種を、コンサートの一番最後にしばしば演奏したという。ここで演奏されるのは、デンマークの作曲家で「北欧のヨハン・シュトラウス」の異名をとるハンス・クリスティアン・ロンビ(1810-1874)の作品。母国では大いに人気を博したこの作曲家ならではの楽しい一曲で、シャンパンのコルクを抜く音で威勢よく始まり、乾杯のグラスを重ねるごとに酔いどれ気分になってゆく。

ヨハン・シュトラウスII世：皇帝円舞曲 Op.437

ヨハン・シュトラウス2世の三大ワルツの一つにも数えられる<皇帝円舞曲>は、まさに「皇帝」の名にふさわしい、堂々としたスケールの名作である。1888年、シュトラウスII世64歳の年に作曲され、ベルリンで初演されたと伝えられるこの曲は当初「手に手を取って」というタイトルが付けられていたが、ドイツ帝国皇帝ウィルヘルムII世がオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフI世を表敬訪問した際に、両皇帝の友情の象徴として「皇帝円舞曲」と名付けられたという。行進曲風の導入部に始まり、高らかに歌い上げるワルツはいくつもの副主題へと展開して、豊かな表情と豪華な響きを生み出してゆく。

ヨハン・シュトラウスII世：喜歌劇「ジプシー男爵」より “小さいときに孤児となり”

ジプシー男爵こと、さすらいの青年バリンカイが、孤児として生まれ見世物小屋を渡り歩いてきた身の上を、皆の前で語る場面。「生来、気楽なこの私は全世界を旅行した。私は器用な何でも屋。動物の見世物にいたときの様子を見せたい。珍しい手品を覚えこんで旅行もした。軽業師や魔術師になって。そして、終いには魔法使いに弟子入りもした。出来る男には難しいことはない」と意気揚々と歌う。

ヨハン・シュトラウスII世：喜歌劇「こもり」より“チャールダーシュ”

第2幕で、ハンガリーの貴婦人を装って現れるアイゼンシュタイン夫人ロザリンデが「ふるさとの調べよ、それは私の郷愁を目覚めさせ涙を誘う」と歌う曲として知られているが、ここではオーケストラ編曲版での演奏。ハンガリー・ジプシーの舞曲チャールダーシュのスタイルによる華やかな一曲で、ラッシュ（テンポの遅い導入部）とフリッシュ（シンコーペーションのリズムに特徴がある急速な部分）で構成される。

エメリッヒ・カールマン：喜歌劇「チャールダーシュの女王」より “ハイヤ、山こそわが心の故郷”

日本でも近年人気のあるカールマンの最高傑作「チャールダーシュの女王」は、「ハンガリーもの」ならではのエキゾチックな要素とウイナ・ワルツの魅力満載のオペレッタ。この曲は、「チャールダーシュの女王」と謳われる歌姫シルヴァが登場するシーンで歌われる。プロダクションの劇場でのシルヴァのお別れ公演のフィナーレ、今宵限りでシルヴァは情熱的な恋唄を歌うのだった。「ハイヤ!山こそわが故郷!胸は熱く激しく高鳴る」と大らかに歌い上げて始まり、続いてテンポを上げて「ジベンビュルゲンの娘が恋をしたなら、火の玉となって燃え上がる。私をものにしたら、何もかも私に捧げるがいいわ」と、チャールダーシュのリズムにのって足を踏みならしながら踊り、歌う。

ヨハン・シュトラウスII世 & ヨーゼフ・シュトラウス：ピチカート・ポルカ

弦楽器のピッツィカートだけで奏されるというこのユニークなポルカは、ヨハンII世と弟のヨーゼフの合作により生み出された。彼らがたびたび訪れたロシアのパプロフスクで、兄弟仲良く過ごしたひととき、子供の頃一緒に遊んだ時のことを思い出しながら、まるでいたずらでもするように作曲したという。軽妙洒脱なテンポの揺れ、強弱の変化が、演奏には欠かせない。

ヨハン・シュトラウスII世：喜歌劇「ウィーン気質」より“ウィーン気質”

オーストリア大公女ギーゼラとバイエルン王子レオポルトの婚礼にあたって催された祝賀舞踏会のために作曲されたワルツ<ウィーン気質>は、初演当時から大成功を収めたため、シュトラウスII世は晩年、この曲を中心に既成曲をオムニバス形式に採り入れたオペレッタ「ウィーン気質」を計画した。シュトラウスの死により未完に終わったものの、友人の指揮者アドルフ・ミュラーII世により完成され、今日では「こもり」や「ジプシー男爵」とならぶ人気曲となっている。今回演奏されるのはその第2幕、ウィーン会議の舞踏会場でロイス・シュライツ・グライツ国大使のツェドラウ伯爵と夫人のガブリエーレによって歌われるワルツ「ウィーン気質」。甘美でノスタルジックなメロディは広く親しまれている。

ヨハン・シュトラウスII世：ワルツ「美しく青きドナウ」Op.314

この曲はもともと、当時プロイセンとの戦いに敗れて暗く沈んでいたオーストリア国民を元気づけようと、カーニヴァルの開幕に催されたウィーン男声合唱協会の演奏会のために1867年に作曲された。ハンガリー生まれの詩人カール・ベックによるドナウ川とドナウの乙女に寄せる詩に作曲したこの作品は、シュトラウス初の声楽曲でもあり、初演のときの評判はさほどではなかったというが、同年のバリ万国博で演奏して以来、「我が家のオウムでさえ口ずさむ」ほどの爆発的ヒットとなったという。今日でも、オーストリアの非公式な第2国歌と呼ばれるほどの人気曲であるの言うまでもない。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでアンコールの定番となっているのはご存知のとおりだ。